
チート使いの悩めるチート

独楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート使いの悩めるチート

【Nコード】

N1894P

【作者名】

独楽

【あらすじ】

不便で仕方ないチート能力を持って生まれた沙千 紡。その能力と前向きに向き合う物語。 シリアス半分コメディ半分+ 。

チートな説明（前書き）

初めまして、作者の独楽です。東方Projectの二次創作で『東方 神降臨』を書いているのですが、知っている方はいないでしょう（PNも違いますし）。

この作品は、上記の作品の合間にちよつとずつ、ゆっくりと書いて行こうと思っているので、のんびりと付き合って下さると幸いです。

今回は、第一話という事で、説明的な内容になっています。セリフが少なく、見ていてつまらないと思うのでさっと目を通して頂けると助かります。

一話目から、そんな感じで大丈夫か？ 大丈夫じゃない、大問題だ。ってなぐらいシリアスな雰囲気が漂ってます。

次回からはちゃんとコメディを交えつつ、ちゃんとした本編を書いて行こうと思います。

では、長くなりましたが本編をどうぞ。

チートな説明

よくアニメなどではチートキャラが存在する。

昔のアニメでは、運の良さだけで敵を倒すヒーローがいたり、とあるアニメでは、滅茶苦茶不幸な主人公があらゆるチート能力を打ち消す右手で幻想をぶち壊したり。と、このように世の中にはチートと言う物が存在する。

この話は、とてつもなく不便なチートに悩まされている少年の物語である。

またやってしまった。

俺、沙千（みせん） 紡（つむぎ）は平日の朝っぱらから絶望を感じていた。

起床時刻、午前8時。学校開始時刻、午前8時。

どうやっても間に合わない。

仕方がない休むか。

そう思った時に気付いた。

俺は今何を思った？ 何を思ってしまった？

慌てて別の事を思い浮かべる。

（俺は学校に行きたい学校に行きたい学校に……）

今更思い直しても遅かった。休もうと思ったのだ。思ってしまったのだ。

「紡！ 起きろ。学校に行くぞ」

唐突に現れ、俺を引きずり出したこいつは中里なかざと 護まもる。スペック、友好関係、ルックス全てに置いて上の上を極めている天才。まあ二次元にはよくいる、主人公の隠れスターテス以外全てを奪っているキャラだ。

なぜその天才がこんな時間に俺の家の来たのかと言うと、まず俺の通っている学校『水海学園スイカイ』（通称、みずうみ学園）は、校内順位で1位の者は登校時間の自由が許されている。今その権利を持っているのは、護だ。なので、今ここにいても何の問題にもならない。次に、なぜこいつが家に来たかと言うと……

「お前が学校をサボろうと思ったから」

「つむ、なぜ考えている事が分かった？」

「口に出してたぞ。道中で引きずられながら、説明口調で淡々と話すお前は中々シニールだったぞ」

「褒めるな、照れる」

「照れとけ、余計シニールだ」

話を戻そう。今、護が言った通り、こいつが迎えに来たのは、俺が休もうと思ったからだ。頭の中で考えているだけにすれば良かったものを、心で思ったが故にこいつは俺のところまでやってきたのだ。

俺がこの能力に気付いたのは小6の頃だ。いつも通り、かくれんぼの鬼を決めるジャンケンをしていた。俺はいつも負けて鬼になっていた。基本、前の鬼は次のジャンケンに参加しなくていい。なの

で、ずっと鬼をやっていたわけでは無いのだが、参加したジャンケンは全て負けた。今思えば、何故気付かなかったのか不思議だ。

理由は簡単、俺の思った事は全て現実に起こる、逆になって。

思い通りにならないなら逆に悪く考えれば良い方に転がるだろう、と言う考えは誰でも一回は考えただろう。しかし、どうにもうまくいかない。それを叶うようにしたのが俺の能力だ。

一見便利そうだが、これが不便で仕方ない。なんせうまくいくと思った瞬間に全てが失敗するのだから。その上、本気で実行しようと思つた事じゃなければ叶わない。つまり無意識に思い浮かべなければ能力が発動しない。さっきの様に無理矢理変更しようとしても無駄になる。

と言つた具合になんとも不便な物だ。

だから俺は常にマイナス思考を意識していた。テストでもどうせ赤点だろう、と思つておけば確実に赤点は免れる（それでも高得点は取れないのだが）。

しかし、それに伴い、俺は暗い人間になっていった。マイナス思考を保てば保つ程、心が荒んでいく。

ある日、マイナスの極地を見た。

『死にたい……』

そこまで陥つた俺を救つたのが、護だった。

『そんな能力なんて気にしなきゃいい。気にせず生きるよ』

そう護に言われなければ、俺は生きる意味を見失い、彷徨い、絶望を受け入れる事が出来ずに力尽き、絶え果てていただろう。

護に助けられてからは考えが変わった。

確かに護の言う通り気にせず生きれば良かったのだが、そう簡

単には行かないので、とにかく勉強した、頭の回転さえ良ければある程度は回避出来る。その結果、クラス順位でトップに至る程度だった。だが十分な成績を修めるほどになった。

それからは人生がガラリと変わった。護と言う人間に出会えて本当に良かった。そして彼女とも……。

チートな説明（後書き）

いかがでしょうか？

少し後味の悪い内容になった気がしますが、次回は明るくなるように頑張ってみます。

実は、二次創作で書くのは苦手でした。以前に書いたホラー物は1話書いて終わってしまったという……（もう冬だし書く気がしん（ry）なので今回はちゃんと、ゆっくりながらも更新しようと思います。

良ければ感想などを頂けると、参考や励みになりますので是非お願いします。見ていただけるだけでも励みにはなるのですけどね（笑）。

では、今回はこの辺でノシ

日常生活

護に引き連れられてる間、俺は担任からの説教打開策を考えていた。学校までは約10分かかる。その間に考える。

先生が急病にかかる？ いや、先生が可哀想だ。先生に罪はない。それに先生一人いなくなったところで、他の先生が確認するだろう。じゃあ、休校にさせるか。そうだ、それがいい。では、早速。

あれ？ でも、今日って……

「なあ、今日って何かあったっけ？」

「ん？ ああ、三送会だな。どうかしたのか？」

「あ、いや、なんでもありませんよ、うん」

危ない、三送会を潰したら上級生からの反感を買ってしまう。

うちの学校は何かと行事が多い。聞く話によると、生徒会長が優秀で、試しに出してみた案を全て可決した上、見事に全てこなしたそう。因みにその時上がった物で採用された行事は、麻雀大会、花火大会、登山、ゲーム大会（さすがに表向きはプログラム研究会と呼ばれている）、水泳大会などがある。本当にがんばったな、会長。

その結果、何かのトラブルで行われなかった行事は延期ではなく中止になる。まあ、月に一回は行事があるから何か一つ潰れるくらいはどうといったこないのだが、それが三送会となれば話は別。基本、一年の俺等には関係の無い話したが、三年からの反感を買うのは些か危険だ。俺だってまだ生きていたい。

ならば、別だ。さて、何があ……

「着いたぞ」

「え？ ま、まじ？」

「まじ」

さようなら、俺は旅立つよ。

両手を胸の前で組み、天に祈りを捧ぐ。道行く人が此方を見ていたが気にしない。どうせ、もう召されるのだ、今更気にしない。

いや、待て！ まだ打開策はある！

「地球よ、破滅しろー！！」

気が付くと俺は願いを口にして叫んでいた。

出勤中のサラリーマンや登校中の小学生に残念な子を見る目で見られた。しかも、俺が祈ったら絶対に破滅するはず無いじゃないか。

「これで地球は暫く安全だな。それとも何か？ 馬鹿なのか？ 死ぬのか？」

護からの痛い駄目押しを食らう。

何この公開処刑。自分でやったんですけどね！

「もう諦めろ、着いてしまったんだ」

「お前が連れてきたんだよ！」

「叫ぶな、校内にまで響くぞ」

「って、いつの間に中に！？」

ふと気付くと校舎内の下駄箱まで来ていた。誰もいない玄関には俺の叫びが響くだけだった。

「お前が祈りを注いでいるからだ。全く、いくら勉強が出来ても馬鹿だな、お前」

「……ウツ」

確かに元が元だけに、勉強は努力でどうにかしたが、生活上でぼろが出てしまう。それだけはどうしようも無いのだが……

「五月蠅い！」

護にローキックを当てる。いくら友達でも言っただけ良い事と悪い事があると思う。

護はその場に崩れ落ちた。

「ちょ、おま、いきなり蹴はねえだろ」

「五月蠅い！」

もう一発殴ってやろうとしたが、「わ、分かった、悪かった」と謝ってきたため、拳を開いて引つ張り上げた。

分かれば良いんだよ、分かれば。

「ふう、にしても、本当に力だけはあるよなあ、力だけは」

「だけを押すなよ、照れるだろ」

「うん、いや、いいと思うよ、それで」

「またも憐れみの眼差しを向けられる。さすがにボケですよ？ いくらなんでもそこまで馬鹿じゃないよ。」

「しかし、困った。」

「俺は惨劇回避を諦め、もしかしたらまだ先生が来てないかもしれない、という希望を胸に教室へと向かったはいいのだが、見事に全クラスの教室の扉が閉まっている上に物音一つしていなかった。もうすでにSHRが始まっているようだ。流石にこの静かさの中、堂々としていくのは気が引ける。」

「頼みの綱だった護は、「まあ、がんばれ」とだけ言い残して自分の教室へと入って行った。」

「静かさの漂う廊下でうーんと頭を抱えていると、背後から足跡が聞こえてきた。」

「やあやあ、おはようー」

「不意に声をかけられて焦ったが、そのテンションで誰だか特定できた。」

「うーす、日和」

「朝から明るい調子で話し掛けてきたのは、『赤芭アカバ日和ヒヨリ』。何気なく小学校から同じらしい。というのも、自分は小学校の時、男友達と遊ぶ事に夢中で女の子を覚えていなかったのだ。しかし、日和は俺の事を覚えていたらしく、高校に上がって同じクラスになったのをきっかけに話し掛けてきた。中学の時は少しだけ話した事もあったので、すぐに打ち解ける事が出来た。」

「んで、何やってるわけ？」

「ん？ いや、見て分かるだろ」

「ははくん、さては紡も遅刻だな」

「も、と言う辺り、さては貴様もだな」

「ふ、ばれては仕方あるまい、その通り！ 私も遅刻したのだよ！」

日和の甲高い声が廊下中に響き渡る。

こいつ馬鹿だ！

「おい、沙千！ 赤芭！ 何してるんだ、さっさと中に入れ！」

その後、担任だけでなく、生徒指導の先生にもこっぴどく怒られました。

生徒会（前書き）

えー、前は前書きと後書きを書いていなかったのですが、今回からちゃんと書くようにしたいと思います。暇な時にちゃちゃっとね。

さて、三話まで来ましたが、今回である程度進展します。

東方の合間にも、と思ったのですが、ゆっくり書けるこの作品は結構息抜きにもなります。何気東方が戦闘物なので、テンションが上がっていない状態ならこっこのほうが書きやすかったりします。

無駄話だけでしたが、本編をどうぞ。

生徒会

昼休み、生徒指導室からようやく解放された俺は、気晴らしに裏庭に出た。

弁当も財布も持ってきていなかったのだから、教室の食物の匂いは少しばかり辛かったのだ。

裏庭は日陰になっており、夏はじめじめして、冬は寒すぎるので年中通して人影が無い。それが人気を嫌う俺には丁度良く、秋の終わりを告げようとしている寒気を我慢してまでそこを占領しているのだ。

しかし、今日は違った。先客が既にいた。

「あら、こんなところに人が来とはね」

こっちに気が付いた彼女は振り返り、俺を見た。

「まあ、ここには俺ぐらいしか来ないけどね。あんたは、なぜここに?」

「んー、ちょっと人の多いところが暑くて逃げ出したのよ。ほら、三送会でしょ、今日」

「ああ、ということば、あなたは2年か3年……ですか?」

「一応、3年よ。」

ほら、生徒会長として全校生徒の前にも立っただけで覚えてない?」

見えない、全然3年生に見えない。普通にあんたとか言っちゃっ

たよ。それ程、彼女は小さかった。パツと見、身長は145?ぐら
いといったところ。

というか、どこかで見たことがあると思ったら、生徒会長……?」

「と言う事は、あなたがあの天才会長?」

「あー、そんな噂が流れてるんだっけ。

えっへん、私がその天才会長です」

会長が身長と比例した胸を自信満々に張る。

しかし、続け様にこんなことを言い始めた。

「ま、私は特に何もしてないんだけどね」

「? どういうことですか?」

俺の疑問に会長は「ふふん」と意地悪く笑った。

「生徒会に入れば判るよ、幸いメンバーは私以外今期も変わらない
し、私の分、1枠空くから狙ってみなよ、『チイト君』」

「なんで、チイトのことを?」

会長は「さあ?」とだけ言って体育館へと戻っていった。

放課後、俺は護の所を訪ねた。

「会長の事を教える? 別にいいけど何でまた」

「いや、なんかあの俺のこと知ってるみたいでさ、話した去り際

に俺のことを『チート君』って呼んだんだよ」

「ああ、なるほど。あの人ならな」

護は1人、納得したように頷き俺を見た。

「たぶん会長は、お前の事を『チート君』と呼んだんじゃない、
『チイト君』と呼んだんだろ」

「はあ？ 何それ？」

全く言っている意味が分からず混乱していると、護は会長の説明を始めた。

「生徒会長、今となつては前生徒会長か、まあいい。会長こと、『
滝丘^{たきおか}紫^{ゆかり}』。

彼女が生徒会に入ったのは1年の後期からで、彼女が入った途端、この学校が急変した。行事の増加、受験生の増加などの目につくところから、何やらバツクのお偉いさんが強化されたとか」

その話は聞いたことがある。その時は理事長が本気を出しはじめたと言つことになっていたが、まさか会長が原因だったとは……。

「会長は何したんだ？」

「んや、特に何も」

「え？ 会長が何かしたんじゃないのか？」

そういえば、会長も同じようなこと言ってたな。

「会長の凄いところは、努力と能力にある」

「能力？ まさか俺と同じ……」

そこまで言つて、「お前の能力なんか話にならんよ」と一蹴されてしまった。ふん、どうせ使いにくい能力だよ。

「彼女の能力は、寝ないこと」

「……………はい？」

「お前、今たいしたことないと思つたる」

(ギクッ)

「ところがどっこい、」

「言い回し古いよ」

「寝なくても平気、つまりその分人より長く動けると言うことだ。そこに彼女の頑張り屋を加えれば出来ない事はほぼ無いだろうな」

「成る程、でもなんで俺のことを『チイト君』って呼んだんだ？」

「彼女は、全校生徒の名前を暗記している。その時、出来るだけあだ名を付けて覚えてるらしい」

「ふむ、で、だからなぜ俺は『チイト』なんだ？」

「お前、本当に頭固いな。沙千紡の真ん中の字と紡の糸辺を合わせ
てみるよ」

千と糸？ 千糸……ちいと……チイト！

「ああ、なるほど！ って、分かりにくいわ！」

「まあ、確かにな」と護も苦笑いを浮かべていた。

「バカと天才は紙一重って言うし、ちょっと変わってるんだよ、あ
の人も」

「あの人も？ 他にも変人がいるのか？」

「知らないのか？」

いくら寝ないで何でもできる人とはいえ、どうしようもない事が
あるだろ、お偉いさんの件とか」

確かにいくらなんでも努力だけで人に協力を促すことは出来ない。
ということとは……。

護は、ハツとした表情を浮かべる俺に「やっと気付いたか」と少
し呆れ顔を見せた。

「だから、会長は生徒会に入れば判るって言ったのか」

「だろうな。あそこは奇才の集まりだから入って損することもない
し、立候補すればいいんじゃないか？」

どうだ？ といった様に首を軽く曲げてこっちを見てくる。

「んー、考えてみるか」

「よし、これで御船ちゃんと親しくなれるぜ」

「お前、それが狙いか。止めとこうかな、生徒会」

「そついうなよ、あの子とは全然交友を深めれないんだよ。

俺が思うに、彼女がそつとうな鍵を握ってる」

御船 みぶね 麻理沙 まじさ。1年生。前生徒会会計、現生徒会副会長。

容姿端麗、お嬢様気質と完璧な才能を持っていて、誰もがお近付きになりたいと思っっている全校生徒の憧れ。とまあ、こんな感じで噂になっているので、俺も気にはなっていたのだ。

確かに来年は確実に会長にまで上がるだろうな。それ相応の物を持っていても不思議じゃない。

「強制はしないけど、入ってみるよ、お前に似たのが多いから楽しいぞ」

護は慌ただしく立ち上がると、「それじゃ、これから出掛けるんで」と言っただけで教室から出ていった。

あの様子だとまたデートか、羨ましいとか思わないけどさ！

てか、最後のどういふことだ？ 俺に似たのが多いって、俺が変人と言うことじゃないか！ ……帰る。

生徒会（後書き）

えー、いかがでしょうか？

実は名前には分かりにくいネタバレがいくつか入っています。今回の紡みたいな、チートだったり、紫の『紫』は寝ない人物として有名なナポレオンが愛した花、ヴィオレット。紫から付けています。他にもバラして大丈夫な所では、日和にもあったのですが、なんと見事に忘れてしまいました（笑）

ネームにも残ってないというね、ダメだこりゃ。

では、今回はこの辺でノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1894p/>

チート使いの悩めるチート

2011年10月6日17時41分発行